ISSN 2435-8231

尚美学園大学スポーツマネジメント研究紀要　第3号
BULLETIN OF SPORT MANAGEMENT SHOBI UNIVERSITY　No.3

論文｜ Articles

学習者に対する敬語指導の一考察

――初年次学習者に対する日本語リテラシー科目『文章表現法Ⅰ』の期末試験結果の誤用分析を中心として――

A Study of Teaching Respectful Language to Learners:

Analysis Focused on the Improper Use of Language in Term-end Examinations in the Subject of Japanese Literacy "Written Expression I" for First-year Students

岩佐　靖夫
IWASA, Yasuo
尚美学園大学スポーツマネジメント学部
Shobi University

2021 年 12月
December 2021

論　文

学習者に対する敬語指導の一考察
――初年次学習者に対する日本語リテラシー科目『文章表現法Ⅰ』の期末試験結果の誤用分析を中心として――

岩佐　靖夫

A Study of Teaching Respectful Language to Learners:
Analysis Focused on the Improper Use of Language in Term-end Examinations in the Subject of Japanese Literacy “Written Expression I” for First-year Students

IWASA, Yasuo

Abstract

Today, most universities in Japan offer subjects of Japanese literacy for first-year students in the liberal arts and humanities to learn the basics of Japanese. This kind of subject usually deals with written language（e.g., reading and writing Japanese kanji）, vocabulary（e.g., learning Sino-Japanese word structures, kanji compounds, and idioms）, writing techniques（e.g., writing short sentences and learning structures and expressions for essays and letters）, and Japanese language usage（e.g., learning the proper use of attitudinal expressions）. Particularly, the analysis of improper use of language shows that one of the most common mistakes is misusing *kenjougo*（humble form）. More specifically, many students incorrectly use the humble form of verbs as their honorific form to express others’ actions. Although the humble form should be used to express the speaker’s actions instead of those of others, they pay no attention to this rule and just care about whether they use respectful language. This is generally caused by the lack of understanding of the basics of respectful language and the lack of attention to its

forms and structure. This improper use of *kenjougo* due to inattention to the forms and structure of respectful language is commonly found not only among university students but also among all Japanese speakers. This study observes the above-mentioned incorrect use of *kenjougo* as well as notable examples of the proper and improper use of *kenjougo* by first-year students in the Faculty of Sport Management at our university to explore effective teaching methods.

要　旨

現在、日本の大学の文科系学部では、日本語の基礎知識養成のため1年次生で日本語の基礎的項目に関する科目の設置を行うところが多くなっている。この科目は、表記面では漢字の読み書き、語彙面では漢語の語構成や熟語・慣用表現の学習、書記面では短文から手紙文・論説文の構成及び表現、運用の面では敬体や待遇表現のふさわしい使用等である。これらのうち、言語の誤用側面を考察した場合、最も顕著な誤用と判断されるものは謙譲語の誤用である。具体的には「（よろしければ）一つ頂いてください」「お求めすることが出来ます」などのもので、形態の丁寧さを優先し、自身を低め、自身の動作のみに使う謙譲語を相手に対する尊敬語として使用するという誤用である。これらは敬語の基本的な理解と形態及び構成に対する細かな不注意により起きる場合が多い。この敬語の形態及び構成の不注意に起因する謙譲語の誤用は、大学に在籍する学生だけではなく、一般社会における謙譲語の誤用としても幅広く観察される。本稿ではそうした誤用及び本学スポーツマネジメント学部に在籍する1年次生の謙譲語の正用・誤用の顕著な事例を観察し、有効な指導法となるものを探りたい。

キーワード

待遇表現（Attitudinal expressions）／ 謙譲語（*kenjougo*（humble form））

丁寧語（teineigo（polite form））

誤用（improper use）／ 承接（connection）

はじめに

現在、日本の大学の文化系学部では、国語力及び日本語力の基礎知識習得のため、1年次生を対象とした基礎日本語力習得に関連する科目の設置を行うところが多くなっている[(1)]。本学スポーツマネジメント学部スポーツマネジメント学科では『文章表現法』という名称の科目で、各年度春学期の学習には教科書を使用し[(2)]、主に学生の書記言語能力向上を目的としている。当書に含まれる口頭表現を含む種々の言語表現の中で、漢字（表記）で言えば誤字、読解で言えば誤読など、いわゆる誤用のうちで最も多いものが敬語の謙譲語の誤用である。敬語は待遇表現の一種であり、待遇表現とは語彙の側面を中心として相手との関係によって言葉ないし表現を使い分けることである。この待遇表現を敬語を使用する視点から捉え直せば、場面、聞き手との上下関係や信頼関係、お互いの立場などの関係を把握し、それによって適切なことばを使用し、特に目上の相手にふさわしい言葉ないし表現を使用することである。この点で、丁寧な言葉だけを使っていれば待遇表現としてふさわしくなるわけではなく、この表現者の意識だけを優先して言葉を使用する上述した謙譲語の誤用が待遇表現中最も直されるべき誤用である。現在は相手に違和感や負担を与えない、ただ自分を低めることを尊重した正確な謙譲語の使用が求められていると言える。本稿では、筆者が担当した2021年度春学期の『文章表現法Ⅰ』[(3)] クラスにおいて、そう

（1）　一般的にリテラシーの名前が付いた『日本語リテラシー○○』の名称となるところが多いが、他に日本語表現法や口語表現法、本学スポーツマネジメント学部スポーツマネジメント学科における文章表現法、又、必ずしも日本語の名前が付かない『学習の基礎○』などの名称になるところも少なからずある。リテラシーとは直訳では識字能力で、読解能力および書記言語の習得のことである。

（2）　『基礎から学べる！　文章力表現ステップ【文章検３級対応】』（公益財団法人日本漢字能力検定協会）

（3）　『文章表現法Ⅰ②』クラス及び『文章表現法Ⅰ⑦』クラス。後述の期末試験の受験者は各クラス20名である。

した謙譲語の具体的な誤用を考察し、そこから考えられる指導論を考察したい。

1. 期末試験問題

日本語は待遇表現、特に敬語がよく発達したことばとして知られている[(4)]。日本語の敬語を考える時、前記の通りその乱用が多く指摘されているのが謙譲語である。かつて相手が上か下かということを人々が絶えず意識し生活していた時代には、それに応じて尊敬、謙譲、丁寧語の三種類の敬語を明確に使い分けていた。近代社会が成立し、日本の社会が基本的に皆平等、対等と法的に認められた時点で敬語にも混乱が生じてくる。上下の意識が混乱しても、客観的に相手を把握し、相手を高く扱う尊敬語の使用は比較的簡単に出来るが、自分を低めた言い方、謙譲語は使用が乱れることが多い。具体的には「彼が申すにはですね」、「他の方にもそうした方がおりました」、「お箸で頂くフランス料理」[(5)] など、言い方としては丁寧であっても、動作主を低めた言い方である謙譲語を、尊敬語を使用しなければならない場面で相手に使用してはいけないことの意識の欠如が謙譲語の使用の乱れに繋がっている。

以上から、筆者担当の2021年度春学期『文章表現法Ⅰ②』クラス及び『文章表現法Ⅰ⑦』クラスでは、前記教科書の後半部分にある謙譲語の誤用修正の指導に力を注いだが、期末試験では最初の問題に以下の誤用修正の問題を出題した[(6)]。

試験の実施にあたって対面授業にオンライン授業が挟まれた形になった関係もあり、必ずしも対面で待遇表現の指導が十分に行えなかったことから、教科書、ノート、オンライン授業時の配布資料等参照可の形で試験を実施した[(7)]。

（1）　これ、頂いてみますか？
（2）　子供達にお知らせしてみます。
（3）　安いお値段でお求めすることができます。
（4）　他の先生方にもそうした方がおりました。
（5）　先生は入学式で開式の辞を申されるそうですね。
（6）　資料を拝読されましたら、こちらにお戻しください。
（7）　只今、担当の者は席を外されています。
（8）　博士はそう述べておられた。
（9）　本日は菅原様にも御臨席頂いております。
（10）　新潟出身のお客様にお見せすると、「懐かしい」と言っておりました。

（4）　中国語では敬語は『你』の下に『心』のついた漢字で、日本語の直訳では『あなた様』を示す意味で敬意を示すという語としての敬語は基本的に一語である。英語にも「おっしゃる」、「いただく」、「召し上がる」等語彙のレベルでの敬語は存在せず、複数の助動詞や過去進行形を使用し敬意を表している。フランス語やスペイン語は人称及び単数か複数かが敬語を表現する手段になる。

（5）　それぞれの正用は「彼がおっしゃる（言われる）にはですね」、「他の方にもそうした方がいらっしゃいました」、「お箸でお召し上がり頂くフランス料理」である。

（6）　期末試験の全体的な構成は、最初にこの謙譲語の誤用修正の問題を出題し、次に品詞の種類や活用、語構成に関する異種選択の問題、三題目に語及び慣用表現の用法に関する問題、最後に文章表現における全体的な理解度に関する問題の大設問を四題出題した。期末試験当日に提出する課題やオンライン授業が続いた関係で、この問題を記述式の問題としたほかは、他を選択形式の問題として出題した。

（7）　（1）～（10）までの傍線部分の正用は（（3）を除く）、それぞれ「召し上がって」、「お求めになる（お求め）」、「いらっしゃいました」、「おっしゃる」、「ご覧になり」、「外しております」、「いらっしゃった」、「されています」、「おっしゃっていました」である。後者二つは合成語の訂正事例になるため、解答は他に複数存在する。

問題（2）は子供達を対象に謙譲語の表現を修正するということは修正出来ない誤まりであり、問題として不成立であるため、採点の対象から外し学生全員に点数を加点した[8]。これらの問題は、語の形態として単純語と合成語の両者の誤用が修正出来るかどうかを主眼にして問題を出題した[9]。

2. 期末試験結果　　正用と誤用の考察

本節で先ず正答から考えられることを検討したい。

採点に際し、「いらっしゃいます」と「お出でになります」、「おっしゃいます」と「お話しになります」、また前記後者例の動詞の連用中止形の前に待遇性接頭辞[10]と後ろに「になる」が接続して尊敬語になるものと動詞の受身形が尊敬語になるもの等、訂正された正答の尊敬語の形は複数存在し、絶対的に一つを正答とすることは出来ない。ここでは上記例また上記例に準じたものを正答と認め、採点を行った。

以下は担当2クラスで正答率が高かった順である。

表１　問題１　上位５問の正答率

順位	問題番号	正答となる表現	正答率（%）
1	（4）	いらっしゃいました	77.5
2	（1）	召し上がって	57.5
3	（8）	いらっしゃった	47.5
3	（10）	おっしゃっていました	47.5
5	（6）	ご覧になり	35.0

問題（4）の「おりました」を「いらっしゃいました」とする正答者は40名中31名でほぼ8割の学生が正答し、理解は出来ていると考えられる。この「いらっしゃいました」の異形態[11]である「いらっしゃりました」の回答が2、3名見られている。同様に問題（1）の「召し上がって（ください）」は「お召し上がり（ください）」、問題（8）の「いらっしゃった」は「いらした」も同様な事由に拠り、後者の回答も正答としている。また、問題（6）の「ご覧になり」は「ご覧になられ」の回答が正答者14人中10人と多く、これは厳密には二重敬語であり不正解となるところだが[12]、前記の解答指針に準じて正解と認めている。

これらの結果から判断されることは、「いらっしゃる」、「召し上がる」、「おっしゃる」などの語彙レベルで敬語が一つの尊敬語であり[13]、学生がアルバイト先などの場面で使用頻度が高いと認められる語については正しい尊敬語が理解出来ているということである。「ご覧になられ」は二重敬語の形であるが、上記の通り回答者のおよそ7割がこれを正答としている。これは語と

（8）　2点

（9）　3節にも記載するが、社会でよく観察される誤用を中心に出題した。（1）は以前の学生の誤用、（8）は書籍内の表現、（10）は飲食店の経営者が述べた表現である。

（10）「お」、「御（ご）」である。

（11）同一の形態素が複数の形態を持つ時、異形態があるという。

（12）「ご覧になられ」、「いらっしゃられ」は二重敬語であるが、必ずしも不適切ではないと認めるこうした敬語の使用は、敬語論の学説では承接である。ちなみに謙譲語で承接が最も多く見られる例は「お伺いいたします」である（本来は「伺う」一語が謙譲語）。これを原則に則り「お伺いします（する）」だけを正答とすることは、語用論的な見地からは成立が困難である。採点もそうした視点を基準として行っている。

（13）外国人に対する日本語教育では語彙レベルの敬語という名称を付けている。

しては一語ではないが、「ご覧」という形が日常生活で使用頻度が高く、「いらっしゃる」や「召し上がる」と同様に尊敬語であると認識されており、形としては尊敬語の意味を示す受身形を接続させる意識が働いている結果であることが窺える。

正答率として表に示されているものに続いて高いものは（3）の「お求めになる」が25％で、以下は20％未満の正答率で複数の正答が認められる回答が続き、「お求めになる」も「お求めされる」、「お求めいただく」の正答が若干数存在する。ここで「お○○になる」という形の正答率は、上記の語彙レベルで敬語が一つの尊敬語になるものより、10％以上正答率が低いということである。学習者は少なからず「お○○になる」という形が尊敬語を示すことは分かっていても、全体的にこの形が尊敬語を示すという認識ははっきりしていず、これを尊敬語の指導として押さえる必要が生じている。

学習者は尊敬語が一語として独立している「いらっしゃる」、「召し上がる」などは尊敬語の理解が出来ているのと同時に、「ご覧になられる」、「おっしゃられる」という尊敬語は二重敬語であるという意識を恐らく持ち合わせていない。しかしながら、現代敬語論における承接の視点を鑑みれば、これを完全に誤用とすることも望ましいとは言い難い。尊敬語の相応しい指導は、語彙レベルで敬語が一つの尊敬語、「お（ご）○○になる」、受身形はそれぞれ独立して尊敬語になることを指導する必要があると考えられる。

次に誤用について考えられることを取りまとめたい。

誤用は多肢に亘っており、各誤用が生じた事由の分析を行うことは本稿の範囲を超える。ここでは正答率による考察同様に2クラスの誤答率をまとめ、考えられる事由を取りまとめたい。

表2　問題1　上位5問の誤答率

順位	問題番号	誤答となる表現	誤答率（％）
1	（10）	おっしゃっておりました	37.5
2	（6）	「拝見」が付く表現	30.0
3	（8）	おられました	15.0
3	（4）	おられました	15.0
5	（9）	になっております	10.0
5	（9）	くださっております	10.0

初めに学習者の4割近い誤答を占める（10）では、「おっしゃっておりました」と謙譲語の「おりました」が抜けないケースが多い。「言っておりました」の正答は「おっしゃっていました」か単一の語で「おっしゃいました」、二重敬語で承接を認める場合は「おっしゃっていらっしゃいました」が妥当だが、これは次節でも触れるように「おる」を丁寧な言葉とだけ認識し、誤って尊敬語として使用しているケースである。この言葉の丁寧さのみを認識し、謙譲語を尊敬語として使用している誤用が誤用率の順位二番目の（6）「拝見」が付く表現である。「拝見」、「拝具」、「拝察」など、「拝」が付く表現は使用者の位置を低める謙譲語であるが、これが謙譲語であるという意識がなく、単語の丁寧さだけを優先して使用した誤用である。（8）と（4）の「おられました」は「おる」が入るという点では謙譲語を使用した誤用であるが、謙譲語を尊敬語と勘違いして使用している上記（10）、（6）のケースとは若干誤用の質的な相違がある。

「おられる」の「られ」は形式上受身形であり、可能形が作れる所動詞である。すなわち自分の意志は反映されない。これよりこの形は敬語としては尊敬語になる。尊敬語の形式は、会話及び文章の共に多く用いられる受身形（「（ら）れる」）と基本的に会話の表現である「お／ご～に

なる」の形である。「おられる」は尊敬語の形である受身形に謙譲語「おる」が接続した形であり、この敬語はつまり尊敬語と謙譲語が合わされた形となっていて敬語の表現としては正用とは言えない。この「おられる」は尊敬を示す「（ら）れる」が謙譲語の「おる」の含意を上回る形で、社会的には尊敬語として使用されている。ここでは学生にそうした意識がなく、ただきれいというだけで無自覚に尊敬語として使用している誤用である。「おられる」という語は上記の経緯で成り立った語であり、正しい敬語としては使用しないことが望ましい旨の指導がなされる必要がある。

誤用率の順位5位の（9）の2種の誤用は、誤用率最多の（10）の誤用と同様に謙譲語「おる」を尊敬語として使用している誤用である。この「おる」を尊敬語として使用している誤用は、他の選択肢の誤答にも散見されている。

学習者の誤用は多肢に亘るが、誤用率の順番で観察した場合、謙譲語を尊敬語として使用した誤用、具体的には「おる」の誤用が多く認められる。敬語表現のふさわしい習得には、この「おる」が尊敬語としては成立し得ないことを、形式的また歴史的な側面をはじめとして、様々な例により繰り返し指導することが必要である。

3.「おる」、「おられる」の通時的な誤用

「おる」という語が改めて謙譲語であることが認識されれば、これが含まれる語を複合語の場合でも尊敬語として使用することは出来ない。大野（1993）は、「おる」は元は座っている意味で、昔は偉い人の前では座って対応したため謙譲語としての使用が確立した旨を述べている。そのため「（自分は）国語学などをやっております。」といえば、自分を低めた言い方になるが、これを「おります」を丁寧な言い方とだけ思い、その結果「あなたは何をしておりますか」と言うことが間々あり、動作主を低めた言い方であることが分からなくなっているのと同時に、これは相手に対して失礼である旨が述べられている[(14)]。

上記書は1979年が初版でこれは現在より約40年前の事例であるが、当時より謙譲語「おる」の使用に混乱している状況のあることが分かる。言葉の使用状況に一層の変遷を来している今日であるが、現代の書籍や口語からその後の「おる」、「おられる」の使用状況を観察したい。

・マエストロ・ムーティは、コロナのこの時期に空いた時間を利用して、この曲を一生懸命勉強したいとおっしゃっておりました[(15)]。
・マエストロはだんだんお仕事を少し減らしていくとおっしゃっておりまして、2年後にはシカゴ交響楽団の方もお辞めになるご予定だと伺っております[(16)]。
・生前、三波伸介さんはとっても陽気な方で、常に周囲の人に気を配り、笑いを心がけておりました[(17)]。
・すみません、使用した教科書を（学生に）尋ねております[(18)]。
・今でもやっておられるんですか[(19)]。

（14）　大野晋編（1993）『対談　日本語を考える』中公文庫，p.41
（15）『日本ウィーン・フィルハーモニー友の会会報第111号』p.5
（16）『日本ウィーン・フィルハーモニー友の会会報第111号』p.6
（17）「笑点　さよなら三波伸介」https://www.youtube.com/watch?v=ocgoLMaERUU&t=1105s、2020年　番組冒頭部分での司会者林家こん平の言
（18）　某大学の教員会議での司会教員による言
（19）　筆者の電話口での愚父の言

・池田先生は、多くの学者と違って、文献や事実の上に明白に表れている問題だけではなく、書かれていないこと、扱われていないことが何であるかに気付き、その意味を問うことで全体の姿を考えるという姿勢を持っておられたことである[20]。

初めの二つの文章は近刊された書物内の翻訳の表現である。この二文目文末の「伺っております」は、前節での考察からも謙譲語として正用であると判断される。同一の書き手による一文目の文末「おっしゃっておりました」と二文目の文中「おっしゃっておりまして」は、「おっしゃる」という言葉を使用する相手に対し「おりました」の謙譲語を接続させて使用する点では、敬語の使用として前節の考察から妥当であると判断することは困難である。

ここでは書き手は連続してこの表現を使用しているため、こうした表現の使用が無自覚になっている疑いがあることである。これは期末試験の問題（9）の出題目的に重なるものである。つまり、書き手は敬語の使用に際し、尊敬語と謙譲語の区別に厳密な点が曖昧であるために生じていると言える事例である。

同様の事例が三文目の事例である。これはテレビ番組内での表現であるが、「～ておりました」は尊敬すべき相手を主語として使用するには不適切な表現で、こうした表現が文語・口語の両方に多い状況が窺える。

四文目は教員の言である。これは「おります」の利用としては正しいが、前に「尋ねる」という尊敬語が接続している。この文章は主語が発話者自身である。学生に対する文章としては「聞いております」か「伺っております」を使用すべきであり、この例では発話者は主語が自分自身ではない場合に「伺っております」を使用しかねない事例であることが窺える。

よく関西方言で「行きおった」、「食べおった」、「やりおった」などの表現及び「泣いとった」、「見とった」、「やっとった」などの表現がある。関西表現と標準語で「おる」が共通するが、上記の表現は標準語では「行っておった」、「食べておった」、「やっておった」及び「泣いておった」、「見ておった」、「やっておった」になる。関西方言での前者と後者の三例では形態の相違により、表現意図の相違はあるが、この二種の表現も自分より下の対象を見下す表現として使用されていることがわかる。「おる」は待遇表現としては謙譲語以外に卑語にも属する。関西方言の「おる」の言葉の意味も前述大野記と同一になるものであり、こうしたことから日本国内の日本語としては「おる」を「おります」と敬体にしても相手に使用出来ない語であることがわかる。

五文目と六文目は愚父の発話及び教員による書籍内の文章である。これは前節で観察した尊敬語と謙譲語の混淆事例である。

上記で謙譲語「おる」は、自分より上の対象として崇める話し手を主語として使用する場合には不適切であることを述べた。これが前節に記した通り、現在社会的に「おられる」は尊敬を示す受身形の「（ら）れる」が謙譲語の「おる」の含意を上回る形で、尊敬語として使用されていることが認められる。

これを広く様々な場面で使用することはふさわしいとは言えず、完全な正用とすることは出来ないが、世代の荘重語[21]として認められるというケースであり、尊敬語の意味で使用が垣間見られていることは周知の事実である。しかし、管見では若い世代にはあまり使用されている感は抱けず、この二例に見られるように年配者により多く使用されているのではないかという感じが

（20）　鈴木孝夫（1991）『ことばの社会学』新潮選書，p.137

（21）「荘重語」とは荘厳で重い雰囲気を醸し出すために使用される言葉のことである。「おられる」の他に「申される」や「参られる」など、下位者が上位者に向かって謙譲語を荘重に使用した成立の歴史的な経緯から、現代敬語でも謙譲語が荘重語になっている。

ある。この中で現在社会的な使用としては「おられる」が多用されている現象が前述の通り認められる。

荘重語の尊敬語としての使用の是非について詳細の考察は行わないが、少なくとも「申される」、「致される」、「参られる」などの荘重語は現在社会一般では尊敬語として使用されていない。同様に「おられる」という荘重語も現在社会の尊敬語としてはふさわしくないという認識が望ましいものではないだろうか[22]。荘重語自体は厳めしい雰囲気を醸し出すために使用する語であるが、本来は尊敬語を使用しなければふさわしいとは言えず、自身の荘重的な感覚を優先させることは、現代敬語の使用の観点からは誤りと認められて然るべきものになると推察される。「おられる」は少なくとも前記の通り「いらっしゃる」、「お出でになる」がふさわしくなる。この語は現在各メディアでも基本的に尊敬語として使用していない。

荘重語は未だ使用が認められているものの、語の形態は尊敬語としても本来誤用に属するものである。本来謙譲語の形に尊敬語が接続するという統語的な構造説明も、学習者がことばないし敬語への興味を抱くことになると考えられる。荘重語は現在尊敬語としての使用は基本的に望ましくないことの指導が必要である。

4. 一般書による敬語の指導指針

最後に一般書による敬語の指導指針を行っているものについて確認しておきたい。

前田安正著（2014）『朝日新聞校閲センター長が絶対に見逃さない間違えやすい日本語』中、第1章の5節[23]に二者択一の形で敬語の用法について掲載がなされている。以下がその11項目である（1～11は筆者による付け方。太字は書籍内では茶）。

当書を敬語の代表的な指導指針書として取り上げた理由について、『まえがき』[24]に、筆者が朝日カルチャーセンターの立川教室で受講生に対して講習を行った内容である旨の記載がされている。これは、口頭表現及び書記言語としての敬語ないし待遇表現の基本的事項の習得という点で、大学初年次における日本語リテラシー教育と完全に重複するものであるため、敬語の一般的な指導指針を行っている代表的な書籍として取り上げることにした。

（1）　①当店では、割引券が**ご利用でき**ます。
　　②当店では、割引券が**ご利用になれ**ます。
（2）　①お帰り口で、お連れ様が**お待ちして**います。
　　②お帰り口で、お連れ様が**お待ちになって**います。
（3）　①こちらに山本様は**おり**ますか。
　　②こちらに山本様は**いらっしゃい**ますか。
　　③こちらに山本様は**おいでになり**ますか。
（4）　①部長、お客様が**参り**ました。
　　②部長、お客様が**いらっしゃい**ました。
（5）　①この資料を**拝見して下さい**。
　　②この資料を**ご覧下さい**。

---

(22)　参考までに御尊父が本節６文目の教員と出生年が同一になる別大学に勤務する教員に確認を行ったところ、当該教員の御尊父は相手に対し亡くなるまでこの表現を使用した覚えはなかったと述べている。
(23)　書の中に章は設けられているが節は設けられていない。
(24)　前田安正（2014）『朝日新聞校閲センター長が絶対に見逃さない間違えやすい日本語』すばる舎，p.5

（6）　①ポイントも併用できますが、**いかがいたしますか**。
　　②ポイントも併用できますが、**いかがなさいますか**。
（7）　①食事をご用意しました。どうぞ、遠慮なく**いただいて**下さい。
　　②食事をご用意しました。どうぞ、遠慮なく**お召し上がり**下さい。
（8）　①それについては、他の担当者に**伺って**下さい。
　　②それについては、他の担当者に**お尋ね**下さい。
（9）　①その映画を**ご覧になられ**ましたか。
　　②その映画を**ご覧になり**ましたか。
（10）　①講演で、そう**おっしゃられ**ました。
　　②講演で、そう**おっしゃい**ました。
（11）　①本を読ま**させて**いただきました。
　　②本を読ま**せ**ていただきました。

（1）、（2）は「（お）ご～する」という謙譲語と2節に示した「お（ご）～になる」が尊敬語になるかが区別できるかという問題である。この謙譲語と尊敬語の区別を問う問題はその後（8）までての問題で同様であり、（1）、（2）の解説にも留意点として示されている。（3）も謙譲語と尊敬語が明確に識別出来るかを問う問題であるが、「いらっしゃる」と「おいでになる」の二者の尊敬語の相違[25]については触れられていない。解説で注目されるべき点は（5）で、「下さい」は尊敬の意味を含む丁寧語であり、謙譲語としては使用出来ない旨の説明がある。これが（7）にもあるが、（7）には「いただいて下さい」という表現が誤用である旨の解説はされていない。（5）の解説にあるように「いただく」は謙譲語で、そのため「いただく」には尊敬の意味を含む丁寧語「下さい」は接続しないという具体的な説明を付ければ、学習者は誤用を未然に防ぎやすくなる。（8）も同様で「お尋ね下さい」は尊敬語として正用であるが、「伺って」という謙譲表現に「下さい」という尊敬の意味を含む丁寧語の表現は接続しないことを指導することが肝要である。（9）、（10）は「ご覧になられる」、「おっしゃられる」が二重敬語であり誤用に該当するという例である。この解説は（9）に「かえって失礼」、（10）に「二重敬語」と説明されている。前節までにおける考察及び敬語論の承接の視点を鑑みれば、必ずしも失礼には当たらず、二重敬語を完全な誤用と断定することはふさわしい視点であるとは言えない。学習者には元来の尊敬語に受身形が重なって、丁寧な表現になると理解していると考えられるためである。（11）は五段活用動詞の使役形に「さ」が入ったいわゆるさ付き言葉、さ入れ表現であるが、これは形態の誤用であり、敬語の内容的な誤用ではない。文法における理解が出来ているか否かの問題である。

以上から、一般書における敬語の代表的な指導指針は、尊敬語と謙譲語の識別を問うもの、謙譲語に「下さい」を接続させないこと、二重敬語の識別を促すものに大別されると考えらえる。

5. まとめ

初年次学習者に対する謙譲語の誤用修正を主眼とした敬語指導として、効果的な導入方法であると考えられるものは以下の5点である。

（25）　この二者の表現は意味の重ならない領域を示すもので、専門語では示差的特徴である。

（1）動詞「お（ご）○○する」は尊敬語として使用出来ない。

例　×　先生はお話ししますか。
　　×　社長はお迎えしますか。

「する」、「します」が入る表現は一般動詞の能動詞であり、そのため自分の行為を示す。動詞「する」が入る表現は尊敬語として使用出来ない。

（2）動詞「おる」が入る語は尊敬語として使用出来ない。

例　×　何をしておりますか[26]。
　　×　他の先生方にもそうした方がおりました。

「おる」は歴史的に目上の相手に対する時は、自分が座って（おって）対応した。これは全国共通である。したがって、現代語の尊敬語として使用出来ない。

（3）「お（ご）～になる」は尊敬語の形になる。同様に「（ら）れる」の形を取る受身形も尊敬の意味を示す。両者を接続させて使用しない。

例　×　安いお値段でお求めされることができます。
　　×　懐かしいとおっしゃられました。
　　×　昨日はよくお休みになられましたか。

これは二重敬語の使用防止策としての指導案である。

「お求めになる」、「おっしゃる」、「お休みになる」という形で尊敬の意味を示す。これを「お求めされる」、「おっしゃられる」、「お休みになられる」のように受身形を接続させる必要はなく、「お求めになる」か「求められる」、「おっしゃる」か「言われる」、「お休みになる」か「休まれる」のように形態は「お（ご）～になる」か受身形のどちらかを使用する。但し、敬語論の承接の観点から二十敬語を絶対的に誤りとすることは困難なため、待遇状況により使用がふさわしい社会的場面が生じる。基本的にはいずれかの使用で差し支えない。

（4）謙譲語（「いただく」、「うかがう」、「お待ちする」など）には、尊敬の意味を含む丁寧語「ください」は接続しない。

例　×　一つ頂いてください。
　　×　隣の窓口でお伺いください。
　　×　こちらでお待ちしてください。

「ください」は「くだる」と同じ語源になる尊敬語である。したがって「ください」を謙譲語に接続させることは出来ず、上記例は尊敬語、謙譲語のいずれとしても誤用である。初めの文例では、尊敬語としては「お召し上がりください」、「召し上がってください」、謙譲語としては「頂きます」となる。「ください」の語がある場合は尊敬語として使用し、謙譲語としては使用出来ない。

（26）　大野晋編（1993）『対談　日本語を考える』中公文庫，p.41

（5）謙譲語に受身形「（ら）れる」を付けて使用しない。

例　×　今でもやっておられるんですか。

　　×　文献や事実の上に明白に表れている問題だけではなく、書かれていないこと、扱われていないことが何であるかに気付き、その意味を問うことで全体の姿を考えるという姿勢を持っておられたことである。

「おる」は謙譲語であり、これに尊敬の意味を示す受身形「（ら）れる」を接続させる使用はふさわしくない。歴史的に荘重語としての使用が行われた語は、話し手の意図が主になる謙譲語がなっているため、現代敬語では基本的に尊敬語として使用しない。

この他に、単に誤用を部分的な表現を用いて言い換えるだけではなく、前後の文脈からふさわしい敬語ないし敬体を使用するようにする、単語のきれいさのみにつられて、分け隔てなく敬語を使用しないことなどが、謙譲語の誤用を未然に防ぐふさわしい用法を獲得する有効な方法になると思われる。

以上が初年次学習者に対する謙譲語の誤用修正を主眼とした敬語指導として、効果的な導入方法であると考えられる5点である。

おわりに

待遇表現は、個々の語や表現の誤用分析も重要であるが、使用者である学生が複数以上の表現で全体的にどのような表現を使用しているか、そこから使用者の言語観ないし敬語観を把握することも重要である。個別の表現では、文法面における形態的な誤用は少なく、これまで見たように謙譲語を尊敬語として使用する誤用、尊敬語と謙譲語の接続の誤用が圧倒的に多い。本稿では前者について検討したが、後者の例としては「お召し上がりする」、「お頂きになる」などの例がある。これに引き続く形で通常語に尊敬語及び謙譲語を接続させた待遇表現の誤用も多い。

個別の表現では、2節で触れたようにこれまでの敬語の書籍中で基本的に指摘されていない「お待たせしました」と「お待ちどう様でした」、「いらっしゃいます」と「おいでになります」、「かしこまりました」と「承知いたしました」及び「了解いたしました」[27] のなどの相違が理解出来、待遇場面にふさわしい謙譲語の表現が行えるかということも重要である。日本語の待遇表現の向上は生涯にわたって追求される課題であり、大学の初年次教育ではそれらを含めた基礎的な日本語力養成の指導が欠かせない。以降の論文では、2節の中間部に記した本稿での論述の範囲を超えて事由の分析を見送った個々の謙譲語の誤用分析について、論考を取りまとめたい。

参考文献

大野晋編『対談　日本語を考える』中公文庫、1993年
大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典』岩波書店、1980年
小川芳男・林　大他編集『縮編版　日本語教育事典』大修館書店、1991年
菊地康人『敬語』講談社学術新書、2006年
菊地康人『敬語再入門』講談社学術新書、2010年
北村源三発行『日本ウィーン・フィルハーモニー友の会会報第111号』日本ウィーン・フィルハーモニー友の会、2021年

（27）　この三組の表現は外国人学習者に対する日本語教育でも中級前期の段階までに学習するが、各教材において基本的に示差的特徴には触れられていない。

近藤雅之「いわゆる敬語の誤用について　―「おられる」という表現を中心に―」『語文論叢（35）』千葉大学文学部日本文化学会、2020年
中島紀子「「問題な日本語」の誤用分析　―大正大学学部生の実態調査―」『大正大學研究紀要第103輯』大正大学、2018年
前田安正『朝日新聞校閲センター長が絶対に見逃さない間違えやすい日本語』すばる舎、2014年
西村義樹・野矢茂樹『言語学の教室』中公新書、2013年
増井金典『日本語源広辞典』ミネルヴァ書房、2011年
「笑点　さよなら三波伸介」 https://www.youtube.com/watch?v=ocgoLMaERUU&t=1105s、2020年
文部科学省HP『これからの時代に求められる国語力について』「Ⅱ　これからの時代に求められる国語力を身に付けるための方策について　第1　国語力を身に付けるための国語教育の在り方」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301/007.htm、文部科学省、2020年
文化庁『「国語に関する世論調査」の結果について』https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/h16/、文化庁、2004年